

6 声門下原発の喉頭 MALT リンパ腫の1例

甲斐 竜太・佐藤雄一郎・富樫 孝文

県立がんセンター新潟病院頭頸部外科

Mucosa-associated lymphoid tissue (MALT) リンパ腫は、1983年に Isaacson らが提唱した粘膜関連リンパ組織を発生母地とする低悪性度リンパ腫である。喉頭原発の悪性リンパ腫は全喉頭悪性腫瘍の1%未満で、MALT リンパ腫に限ればさらにまれである。今回我々は、声門下に発生した喉頭 MALT リンパ腫を経験したので文献的考察を加えて報告する。

症例は64歳、女性。2012年7月上旬より発声障害を自覚した。8月31日、当科を紹介初診し、内視鏡で右声門下に表面平滑な隆起性病変を認めた。9月18日、直達喉頭鏡下腫瘍生検術を施行し、病理組織は炎症細胞であった。退院後も声門下腫脹が増悪、10月19日、再度の喉頭腫瘍生検術により MALT リンパ腫と診断された。当院血液内科での精査にて限局期の stage I と診断された。機能温存を目的に放射線治療が選択され、外来通院にて加療中である。

7 甲状腺葉切除における Ligasure small jaw 使用症例の検討

富樫 孝文・甲斐 竜太・佐藤雄一郎

県立がんセンター新潟病院頭頸部外科

一般外科手術でエネルギーデバイスには内視鏡手術への応用、手術時間の短縮、術中術後出血や SSI の軽減などの利点があるとされている。しかし、頭頸部領域での使用は始まって日も浅く、標準手術と比較した有意性の検討、コストの問題、若手術者への教育面など解決すべき課題は多い。当科では2011年から Ligasure small jaw を頭頸部手術に使用しているが、今後の継続使用に際して本デバイスの手術における有意性を検討する必要があると考えた。今回われわれは、2007年1月から2012年11月に当科で施行された甲状腺葉切除症例214例（頸部郭清を併施した症例は

含まない）を標準手術群141例、Ligasure 手術群73例の2群に分け、手術時間、腫瘍サイズ、執刀医の卒後年数、術中出血量、術後出血量、ドレーン留置日数、入院期間、合併症の有無について retrospective に比較検討したので報告する。

8 転移性脳腫瘍に対するガンマナイフ単独治療成績 前向き多施設共同研究 (JLGK0901)

佐藤 光弥・五十川瑞穂・森井 研

佐藤 洋輔

北日本脳神経外科病院

【目的】脳転移2-4個の症例に対し、5-10個の症例のガンマナイフ (GK) 単独治療の有効性の比較 (非劣性試験)。

【方法】新規の脳転移、個数10個以下、最大病変の最大径30mm未満・体積10cc未満、総腫瘍体積15cc以下、癌性髄膜炎なし、KPS70%以上などが適格基準。Primary endpoint は GK 後生存期間で、その中央値 (MST) に関し、個数2-4個群に対する5-10個群の非劣性マージンを0.3と予め規定。

【結果】1,194例をA群 (1個: 455例)、B群 (2-4個: 531例)、C群 (5-10個: 208例) に分類。MSTに関して、A群 (13.9ヵ月) はB群 (10.9ヵ月)、C群 (10.8ヵ月) に比して有意に長かったが、B・C群間には差はみられなかった。

【結論】脳転移の GK 単独治療は、腫瘍個数2-4個群に対し5-10個群は非劣性であることが Evidence level II で証明された。